



参加費確定 (重要)

重要事項につき、再度掲載です。

締切り 3月18日(日)
 支払い方法 1) 練習時に直接、会計：金井 (FI) まで
 2) 振込み
 * さくら銀行 麹町支店
 普通 7196197
 オーケストラディマンシュ
 参加費 ￥33,000-

本番当日までに必要な支払いが多数あるので、期日は厳守してください。

(会計：金井 麻子 FL)

エニグマに描かれた14人

今回とりあげる、エルガーの「エニグマ」では、各変奏曲にイニシャルが記されていることは御存じのとおり。スコア序文やCDの解説などを読まれた方はすでにどの変奏曲が誰だか、おわかりかとは思いますが、ここでこの14人を紹介しましょう。

いずれもエルガー本人と親交のあった人々ばかりで、伝えられる人柄や特徴などが、それぞれの変奏曲に非常によく表現されています。

まずは、エルガー本人による説明を引用してみましょう。

「必ずしも音楽家ばかりではない14人の友人の特徴を、彼等を面白がらせ、また自分を面白がらせるために、私がこれらの変奏の中にスケッチしたことは事実ではあるが、これは個人的な事柄であるから公表する必要はない。この変奏曲は単に一つの楽曲としてみなされるべきである。『謎』については説明すまい。その意味は不明のままにされておかなければならない。そして私は種々の変奏と主題の外見上の関係がしばしば浅い事を諸君に警告する。そのうえ、全曲を通じて別のさらに大きな主題があるけれども、それは演奏されない。それゆえ、中心主題はけっして姿をあらわさないのである。これは近来のある種の戯曲、たとえばメーテルリンクの『侵入者』(1890)や『七人の王女』(1891)の中に本当の主演が現れないのと同様である。」

このように、提示されている主題とは別に、演奏されない主題があることを作曲者はほのめかしていますが、これは未だに解明されない謎のままです(広報が考えるに、おそらくは主題そのものが、その謎の中心主題の対旋律となるものではないかと、想像しています)。

さて、それでは各変奏を追ってみましょう。

第1変奏 C.A.E.

キャロライン・アリス・エルガー夫人 (Caroline Alice Elgar, 1848-1920)。エルガーより9才年上の愛妻の肖像。

第2変奏 H.D.S.-P.

ヒュー・デヴィッド・ステュアート=パウエル氏 (Hew David Steuart-Powell)。アマチュアのピアノ弾きで、エルガー (Vn) 第12変奏のBGN氏 (Vc) と共にトリオを合奏した仲間。演奏を始める前の音階練習が表現されている。

第3変奏 R.B.T.

リチャード・バクスター・タウンゼント氏 (Richard Baxter Townshend)。低音楽器の音色を思わせる風変わりな声の持ち主で、芝居好きだったといわれる。ファゴットが彼の声を表現している。

第4変奏 W.M.B.

ウィリアム・ミース・ベイカー氏 (William Meath Baker)。地主で学者のワグネリアン。活気のある精力的な人物だったという。

第5変奏 R.P.A.

リチャード・ペンローズ・アーノルド氏 (Richard Penrose Arnold)。大の室内楽好きの学者で、19世紀の詩人・文藝評論家のマシュー・アーノルドの息子。

第6変奏 イゾベル

イザベル・フィットン嬢 (Isabel Fitton)。エルガーのヴァイオリンの弟子だったが、ヴァイオリンはありふれているという理由でヴィオラに転向。変奏曲もヴィオラが大活躍。

第7変奏 トロイト

アーサー・トロイト・グリフィス氏 (Arthur Troyte Griffith)。保養地モルヴァーンの建築家で、終生エルガーの親友だった。変奏曲はおそらく性格描写と思われる。

第8変奏 W.N.

ウィニフレッド・ノーベリー嬢 (Winifred Norbury)。モルヴァーン近在の18世紀の邸に住む女性。

第9変奏 ニムロッド

アウグルト・ヨハネス・イエーガー氏 (Augst Johannes Jeager)。「ニムロッド」とは、旧約聖書第10章第8-9節に出てくる、ノアの曾孫で狩の名人。Jeagerがドイツ語で「狩人」であることにひっかけた曲名。イエーガー氏はドイツ生まれで、渡英後、楽譜出版社ノヴェロに勤務し、エルガーのよき相談相手だったという。物静かで誠実な人物だったとのことで、変奏もそのとおり。

第10変奏 ドラベルラ

ドーラ・ペニー嬢 (Dora Penny)。モーツァルトの歌劇『コシ・ファン・トゥッテ(女は皆こうしたものの)』の登場人物になぞらえたもの。

第11変奏 G.R.S.

ジョージ・ロバートソン・シンクレア氏 (George Robertson Sinclair)。ヘリフォード大聖堂のオルガニスト。楽曲は、彼の愛犬のブルドッグ、ダンが、堤を駆け降りて河に飛び込む様の描写を交えて表現されている。

第12変奏 B.G.N.

バジル・G・ネヴィンソン氏 (Basil G. Nevinston)。エルガーの親友で、チェロを弾き、よくトリオを

演奏した。

第13変奏 ***

メアリー・リゴン嬢 (Mary Lygon のちに結婚して Mary Forbes-Trefusis)。エルガーが作曲中、航海に出ているとすることで、その海路安全を祈って、メンデルスゾーンの序曲「静かな海と楽しい航海」の主題が引用 (練習番号56番の4小節目からのクラリネットの主題) されている。

第14変奏 E.D.U.

EDU = エドゥ、すなわち、エルガー本人のこと。エルガー版「英雄の生涯」という感じか？
練習番号73番から、第1変奏曲 (アリス) が回想されるあたり、愛妻家のエルガーらしい。

⌘ 独断と偏見のDISK紹介

毎シーズン恒例となりつつある、広報担当の独断と偏見に満ちたDISK紹介です。今回は3曲一挙掲載。本番間近になってしまいましたが、「CD 持って無いから欲しいんだけど、何を買えばいいのかよくわからない」という方の参考になりますでしょうか。.... ?!

御紹介したものは明記ない限り広報所有ですので、試聴希望の方はどうぞお申し出ください。

🎵 プリテン：4つの海の間奏曲

アンドレ・プレヴィン / ロンドン交響楽団

1974 録音 [EMI] CDC 7 64736 2 (輸)

最も代表的と言っていいのではないだろうか。真摯な演奏である。「夜明け」での銅鑼の一発がかっこいい。この盤は、プリテンの『春の交響曲』とのカップリングだが、カップリング違いでよく再発になる演奏でもある。第10回シーズンで紹介したシヨスタコーヴィチ4 & 5番の2枚組にもカップリングされている。

レナード・バーンスタイン / ニューヨーク・フィルハーモニック

1973 録音 [CBS ソニー] SRCR 8998

これは必聴！レニーの2回の録音のうちの旧盤。音色に荒さを感じる人もあるだろうが、この勢い、ただ者ではない。特に「日曜の朝」「嵐」でのラッパには卒倒もの！練習番号4番2・5小節目の3番ラッパがこれだけ聞こえる演奏は他にない。同じく「ピーター・グライムズ」から独立した楽曲の「パッサカリヤ」、「青管」、珍しいイギリス民謡組曲とのカップリング。

レナード・バーンスタイン / ボストン交響楽団

1990 録音 [DECCA] 431 768-2 (輸)

晩年のレニーが出演した最後の演奏会 (タングルウッド音楽祭) でのライブ録音。ハッキリ言って、オケの精度は低い、それを超える力を感じる演奏。ある意味で、とても「プロ並みに上手いアマオケ」っぽい。併録はベト7。こちらも、テクニク云々ではなく、名演。

ヴァーノン・ハンドリー / アルスター管弦楽団

録音年不明 [CHANDOS] CHAN 241-2 (輸)

全般に、普通っぽい、よくまとまっている。アルスター管はシャンドス以外のレーベルでは殆ど目にしないと思われるが、綺麗な音を出すオケのようだ。録音としては残響もほどよく、特に「嵐」がかっこいい。特

筆すべき箇所としては「嵐」の4番ホルンの気合いが凄い。ここの頭打ちのホルンがティンパニよりも大きく聞こえる演奏は他にないのでは？「パッサカリヤ」が続けて聴けるのが嬉しい。

アンドリュー・デイヴィス / BBC交響楽団

1991 録音 [TELDEC] ?? (輸)

プリテン作品集に収められたもの。録音はクリアだが、演奏としてはいたって普通。通常盤もあるが、これは仏テルデックの廉価版名曲集シリーズの一枚として入手。

[番外編]

歌劇「ピーター・グライムズ」全曲 コリン・デイヴィス / 王立コヴェントガーデン歌劇場管弦楽団

1978 録音 [PHILIPS] 289 462 847-2 (輸)

作曲者の自演盤と並んで定番といえると思われる一枚。間奏曲もそれぞれ非常によい演奏で、「夜明け」(第一幕への間奏曲) での銅鑼の一発の気合いが凄まじい。また、「嵐」の面白さは、全曲版を聴いて初めて理解できると言っても過言ではない。

🎵 シベリウス：交響曲第5番

レナード・バーンスタイン / ウィーン・フィルハーモニー

1987 録音 [DG] 427 647-2 (輸)

とにかく最高！必聴・必携！というか、もはやシベリウスではなくなっているかもしれないが、迫ってくる音楽が凄い。特に低弦の威力がただごとではなく、何気なく聴いているとギョッとすが、スコアを見て納得。終楽章コーダのじっくりと時間をかける歌い込みも物凄い。惜しむらくは、最後の2発のテンポだけ速いのは、個人的にはいただけない。晩年のシベリウス再録音のうちのひとつで、7番とのカップリング。こちらも超をつけてよい名演と思う。

サイモン・ラトル / フィルハーモニア管弦楽団

1981 録音 [EMI] CDM 7 64737 2 (輸)

シベリウス作品を結構入れているラトル、これはバーミンガムとの全集以前のもの。ひとことでいうと、カッコいい。何より、最後の2発のティンパニの前打音をこれほど強調しているのは、他にはサロネンのみ。初めて聴いた時にはぶったまげたが、もはやこれ以外では納得できなくなってしまった。

このCDのカップリングはニールセン4番。こちらは同曲の決定版と言ってよいだろう。必携の一枚。

サイモン・ラトル / バーミンガム市交響楽団

1987 録音 [EMI] CDM 7 64122 2 (輸)

ラトル2回め、これはバーミンガムとの全集に含まれているもの。音楽のつくりはほぼフィルハーモニア盤と同内容。

コリン・デイヴィス / ボストン交響楽団

1975 録音 [PHILIPS] 446 157-2 (輸)

ながらく定番となっていた全集に含まれているもの。リファレンスとして未だに色褪せない名演といえる。
(次頁へ続く)

(前頁からの続き)

なにより、第一楽章Nでの2番トロンボーンの係留音はこうでなければならない。終楽章のスピード感も申し分ない。

キリル・コンドラシン / ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団

1976 録音 [PHILIPS] 438 279-Q(輸)

一瞬、ミスマッチかと思うかもしれないが、これがなかなかの名演。全体に速めのテンポで、じっくり謳い込むという表現ではないが、森林を駆け抜ける一陣の風、という風情で、北国を感じさせる一枚。

コンサートヘボウでの一連のライヴ録音のシリーズのうち一枚で、シリーズにはこの他にも超名演のニールセン5番、プロコフィエフ3番を始め、ブラ2、ラヴェルなども入っている。

キリル・コンドラシン / モスクワ・フィルハーモニー管弦楽団

1973 録音 [GLOBE] GLO 6011 (輸)

いや、世の中、探せばこういう掘り出し物があるものだ。録音はあまり良いとはいえないものの、ロシアオケでこの作品が聴けるとは！演奏はコンサートヘボウ盤と同様、速めのテンポだが、決して軽くなっている。音楽に爽快さを求めたい向きには是非とも聴いていただきたい。名演。

ユッカ・ペッカ・サラステ / フィンランド放送交響楽団

1993 録音 [FINLANDIA] 0630-18962-2(輸)

同コンビ2回めの全集に含まれているもので、評判高いレニングラードでのライヴ録音。さすがお国のもの、自家筆中というべきか。隙のない演奏で、小細工を排した真摯な演奏に心打たれる。

セルジュ・チェリビダッケ / スウェーデン放送交響楽団

1971 録音 [DG] 469 072-2(輸)

チェリの正規盤。カップリングの2番とともに、枯彼のレパートリーとしては珍しいと思われるシベリウスだが、そこはさすがチェリ、テンポ的には晩年のパーンスタインに匹敵する悠々たるテンポ。ただし、パーンスタインほどの濃密さを感じさせないのは、オケのせいかな？乱暴に感じる音がひとつもないのは、やはりチェリたる所しか。

ジョン・バルビローリ / ハレ管弦楽団

1957 録音 [DUTTON] CDSJB1018 (輸)

EMIへのシベリウス全集で定評あるコンビによる、同曲の初録音。近年、SP盤の復刻などで貴重な音源を多数リリースしているDUTTONレーベルからのもので、古い音源にも拘わらず、マスタリングによってだいぶ聴きやすい。男性的というか、引き締まった演奏。

[団員からの投稿ぶん]

今回、Vc 横沢氏による評を寄せていただきました。

サー・コリン・デイヴィス / ロンドン交響楽団

(RCA・92年録音・09026-61963-2)

手堅い演奏。トランペットの鳴りがいまひとつという感じを受けるが、弦楽器の刻みがキチッと揃っているところなど、さすがはロン響。全体的に抑制の効いた優等生的な演奏で、熱い血のたぎりを求める向きにはやや不満かも知れないが、「これがほんとうのシベリウス」とか言われると、そんな気もしてくる。

ヘルベルト・ブロムシュテット / サンフランシスコ交響楽団

(DECCA・89年録音・POCL1089)

端正かつ明晰な演奏。とにかくオケが上手い。バランスも良好。透明感を保ちながらも決して冷たい演奏ではない。3楽章最後のティンパニの硬い音色もベスト。同コンビの録音はいずれもクリアーでかつ適度の湿度があって好ましい(ブルックナー6番、アルペン、ヒンデミットなど)。

ネーメ・ヤルヴィ / エーテボリ交響楽団

(BIS・82年録音・BIS-CD222)

1楽章、アレグロモデラート直前のトランペットの強烈なクレッシェンドにはぶっ飛んだ。ヤルヴィの名を一躍世界的なものとした全集だが、正直この頃のエーテボリ響は下手で聴いてられないものも多い。ただ、5、6、7番はいずれも名演で、特にこの5番は素晴らしい。3楽章冒頭の疾走感も申し分なし。最近のDGへの同コンビの録音は好調なので(シベリウス管弦楽曲集、ニールセン交響曲全集など)シンフォニーも取り直してくれないかな~と思っている人が世界に5人はいるはず。

ちなみにヤルヴィは現在日フィルの首席客演指揮者で、今年6月に来日し、シベリウスの交響曲全曲演奏を行う予定。

6月23日 - 3、5、7番(横浜みなとみらいホール)

6月24日 - 6番、Vnコン、2番(サントリーホール)

6月28、29日 - 4、1番(サントリーホール)

サー・アレクサンダー・ギブソン / スコットランド国立管弦楽団

(CHANDOS・82年録音・CHAN6556)

隠れた名盤(?)。テンポは総じて速い(全曲で29分19秒)。ギブソンは1950年代から20年以上に渡り(59~84年)同オケの音楽監督を務めており、この全集録音はこのコンビの長いパートナーシップの集大成ともいえるもの。オケと一丸となって誇張を排してスティックにシベリウスの姿を表現した感あり。パーンスタイン盤と対極?

パーヴォ・ベルグルンド / ヨーロッパ室内管弦楽団

(FINLANDIA・96年録音・WPCS-6008)

ライナーによると、弦楽器の編成が小さく(ファーストから6、5、4、3、2プル)そのせいもあって非常にまとまりの良い演奏となっている。バランス的に弦楽器がかなり近く聞こえる録音となっているため、クリアーかつ迫力のある弦の刻みが一番実感できる。今回この曲を演奏するにあたっては一番参考となった録音。やや管楽器が冴えない感あり。

[番外編]

1915年初演版 オスモ・ヴァンスカ / ラハティ交響楽団

1995録音 [BIS] BIS-CD-800(輸)

一聴の価値ある一枚。唯一の初演版での録音。現行版である最終稿に比べて全体で200小節、5分ぶん近く長く、最終稿での第一楽章は、(アタッカではあるが)二つの楽章に別れた、全4楽章構成になっていた(最終稿の練習番号の付き方でわかる)。冒頭からして、ホルンには悪いが、いきなり現行版での3小節めから始まる。その後も、随所であれよあれよと言う間に我々の知っているこの曲とは違う曲になっていくところが、なんと新鮮。全体には、最終稿では削除された繰り返しが多い事や、不思議な転調の部分など、比較すれば最終稿のほうがより引き締まった姿をしてはいるものの、初稿のこの雰囲気も捨てがたい。特に驚愕なのは第

